

マインドおよび瞑想についての教典の詩節 自らの完全さを認識する

以下に紹介されている教典の詩節の数々は、マインドを静め、知性を浄化する瞑想の力について解明し、洗練された知性がいかに大いなる自己の光を認識するための手段になるかを描写しています。これらの詩節は、インドの二つの偉大な哲学的伝統の教典から引き出されたものです。

サンスクリット語であり、「至高なる真理の本質」と訳される『パラマールタサーラ』は、10 世紀の学者で賢人のアビナヴァグプタによって書かれました。この非二元性の教えについての一連の詩節は、「すべてはシヴァである」という見地に強く確立しています。シヴァとは、絶対なる者、遍在する真実、すべての存在の唯一の源です。それは、カシミール・シャイヴィズム哲学を紹介する役割を果たしています。

「識別の至宝」と訳される『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』は、8世紀の賢人シャンカラチャーリヤによって著述されたと考えられています。生徒と師との間の詩的な会話の形式をなすこの著書は、「ブラフマン、絶対者のみが、真実である」という核となる教えを解説しています。それは、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ哲学の案内書としての役割を果たしています。



『ヴィヴェーカ・チューダーマニ』第 384 節

浄化されたマインドを自らの本質——目撃者、すなわち大いなる意識以外の何ものでもないもの——の中で休息できるようにすることで、人は徐々にマインドを静けさの境地に導く。すると、人は自分自身の完全さの直接的な認識を得る。

英訳：ベン・ウィリアムズ、表紙デザイン：レオ・レゴレッタ、写真：ネトラニ・ケール